間伐材研究所　特別活動報告

行ってきました！ 山見学 & 工房見学 ツアー

木の仕事に、会いに行こう！

H.21.6.21

山

山田林業
（兵庫県神河町）

山田尚弘さんの
「大橋式作業道」を体感！

工房

（有）木星会
（兵庫県加東市）

林典雄さんの
「県産スギ家具」に感激！

間伐材新聞

第27号
平成21年8月2日発行

発行：間伐材研究所
（NPO法人）
京都府綾部市睦合町上溝口20-3
TEL：(0773) 43-1088
(090) 9540-0837（新田）
FAX：(0773) 43-0453

特集 スギというものもとに
日本全国スギ家具メーカー Presents.

P.4~11

「森や木々との関わりを『業』とする方々の現場にお邪魔して、プロの声を訊いてみたい！」

そんなツアーを、6月21日(日)、間伐材研究所の特別活動として企画、10人で行ってきました。

お世話になったのは、兵庫県神河町の林業家＝「山田林業」の山田尚弘さんと、兵庫県加東市の家具工房＝「木星会」の林典雄さん。

研究所設立8年目で初めてのツアーでしたが、プロの山に興奮、プロの工房に感激の、本当に楽しい特別活動になりました！

で、今号は紙面が余りにもカツカツなので、表紙でモッタイぶらずに、さっそく本文に入ります…

始まりは3月14日、「間伐材新聞・第26号」で記事掲載させていただいた「サウンドウッズ」の、NPO設立記念の報告会でした。

隣の席に座ったのが山田尚弘さん。休憩中に話していたら林業家さんとだいうことが分かり、しかもNHKの大橋慶三郎さん特集番組にも登場していてビックリ！おまけに、山に誘って下さいました。

綾部に戻ってメンバーに報告したら、「みんなで行こう！」と決定。「山行くんやったら、工房も！」と思って、4年前の新聞でお世話になった林さんに電話してみたら、これも快諾下さり、本格的ツアーに。

当日は「綾部組」8人と、京都・大阪の「都会組」2人で現地集合です。30代が一番多く、上は70歳、下は28歳という、老若男女バラッバラの、間伐材研究所らしい年齢構成。「サウンドウッズ」の安田哲也さんも、午前中お子さん連れでご参加いただきました。

「綾部組」は、青垣・加美経由の下道コースでした。パラついていた雨も上がり、ちょうどいい感じの「ドライブ日和」！　ついつい寄り道の誘惑が・・・

結局、加美町の道の駅で「トイレ休憩」。朝市やってるし、木工作品もあるし、景色もいいし、結局、長居して・・・集合場所に着いたのは最後でした・・・

41歳の山田尚弘さんは、「山田林業」の5代目として、兵庫県内の専業林家20数名の中でも若手として期待されています。**130年前の植林から始まった山**で、お父さんと2人の職人さんと共に施業、経営されています。

山の説明をする山田さん

山は神河町と、隣の朝来市生野町にまたがる**330ヘクタール**、うち87%がスギ・ヒノキの人工林です。

山田さんの2トントラックに乗せてもらい、集落横の急勾配の路地からゲートを越えて、山中へ・・・

途端に群がってきたのは**アブ、アブ、アブ**・・・山中で動くものにタカる習性があるそうで、しかも刺すヤツです。ツアー気分でやってきた私服の素人たちには、強烈な洗礼でした。

コイツです。推定200匹。

標高は890m。ふもとが360mなので、かなりの急坂です。片手で荷台にしっかりしがみつき、もう片手でアブを払いのけながら上ります。

林道は広く、これだけの急坂でも2トントラックは全く問題なく進みます。

「構造材を、いかに安く、たくさん出すかが重要です。」と話す山田さんは、「道づくり」の達人である大槻慶三郎さんに師事して、**作業道路網の整備による施業効率改善**を進めておられます。

大槻慶三郎さんは大阪府千早赤阪村の林業家で、全国に先駆けてヘクタールあたり200mを超える高密度林内路網を整備されました。崩れない道を作るために「腹ばいになって山の声を聞きながら地形を見分ける」生き方が林業関係者から厚い支持を受け81歳の今でも、全国を飛び回って指導する、カリスマ的存在です。

山田さんの林道の地盤には**丸太を組んで**崩れにくくしてあり、大変な努力が分かります。所々へアビンカーブも設けてあり、トラックは切り返ししながら進みます。水の通り道にも、手作りの**間伐材製堰**が効率的に設置されています。

2トントラックの通る広い林道

間伐の行き届いた明るい森を上り、30分後、標高800m付近で車を降りました。「木材を積んでいる時は15分で上ります。」と山田さんは笑います。

「60年までで皆伐していた昔の文化では、これからの林業は厳しいです。」と山田さんは言います。

「45年ぐらいで崩れるくらい成長しすぎている木を切って、**100年スパン**でやっていった方がいい。柱にする木を真っ先に出して行くことで、収益を確保するべきでしょう。」

間伐の基準は、**ヒノキは3割**ぐらいを一気に、「お互いに干渉する」**スギは弱め**にするそうです。空中

が空き過ぎないよう気を使うのと、枝が太い木も「7～80年で成長が止まる」ので間伐対象です。

「山は、上の木を切って、初めて下(の木)が大きくなる」、**「列状間伐**も、(効率重視の)縦向きよりも、**横向き(等高線状など)に**切った方が成長には有効。」

…「間伐材研究所」の視察ということで、道づくりのことより、間伐のポイントについて、熱く熱く語って下さいました。

トラックでちょっと下り、130年生のスギ林に連れて行ってもらいました。

ここで山田さんは、新しい取り組みを行っています。工務店や施主を山に招き、**立木を直接見てもらって販売**するシステムを作っているのです。

何本かの立派な木に、購入済のテープが巻かれていました。「あれが、テレビに出た木です。」と山田さんが指差す1本は…「あっ、**『ジモンの木』**！」そう、大橋さんのテレビで山田さんの山にやってきた「ダチョウ倶楽部」の**寺門ジモン**さんが「ひねくれてる所がオレそっくりだから」という理由で購入された木です。

予想通り、数人が走っていって、記念撮影してました…申し訳ありません。ミーハー団体なんです。

「ジモンの木」！

「昔は、下からここまで2時間かかりました。今は歩いても30分。」と山田さん。道の大事さを痛感！

お昼は、神河町と社町のちょうど中間となる、多可町八千代区で。2年前に教えてもらった、体験施設「エアレーベン八千代」の中にあるレストラン「とうふ亭」で、豆腐のフルコースを満喫しました。

先付けの冷奴、湯葉の刺身に続き、名物の「一夜凍豆腐」は、わさび醤油で食べるトロトロの湯葉風。そしてメインは豆乳を鍋で炊く「おぼろ豆腐」。その後の吸い物やデザートも豆腐で、みんな満足！

「サウンドウッズ」の安田さん親子も付き合って下さり、NPOの話など色々聞かせていただきました。

「とうふ料理」の残骸・・・早く撮って！

お腹も満足したところで社町へ出発！川端木工部長の完璧なナビで、約束のピタリ5分前に到着。

「間伐材新聞・第14号」の取材以来、4年ぶりの訪問でしたが、**「木星会」の林典雄さん**夫妻は変わらない笑顔で迎えてくださいました。

「木星会」は、**兵庫県産のスギ・ヒノキ**を使った自然家具工房です。「エンピツ1本でやってきた」と代表の林さんが言うように、最大の武器は、**デザイナーの前職**で身につけた設計技術、完成イメージをリアルに描き出す見事な**パース(イメージ図)**でお客さんを納得させ、家具から店舗の内装まで幅広く取り組んでおられます。

ショールームには、大きな節が味を出す**一枚板テーブル**や、木の地肌が風格ある**カウンターデスク**、木目鮮やかなツヤツヤのベンチなど、美しい針葉樹家具ばかり。

みんな早速写真を撮ったり、座ったり、寝転んだり…すみません、木、大好きな人ばっかりなんで。

次に、**工房**を案内していただきました。プロの仕事場なんて入るの初めての人がほとんどで、大小様々な工作機械や大きな集塵機に感激！

工房の一角に、**スギ&ヒノキ製の、大きな収納棚**が並んでいました。これは…

プロの仕事場に興味津々！

報告はP.12につづく

特集

「日本全国スギダラケ倶楽部」&「スギやねん、関西」presents…

「スギ」という名のもとに

第1話「陽の当たる場所」〈PR+PR〉

万博公園に出現した4m四方の「スギプール」

スギ空間、スギ屋台、スギのマス酒

その会場で、ひときわ目を引いたのは4m四方の、巨大なスギの空間でした。吉野杉の梁を井桁に組んで積み重ねただけのシンプルな空間には、立ち止まって眺める大人も、登って遊び出す子どもも興味津々で、芝生公園の中の、格好の休憩所となっていました。

その片隅では、三角形が合わさったような形や、柱が湾曲したような形の、スギ製の不思議な家具が飾ってあります。

テントの中では、細い細いスギ・ヒノキで作られた家の模型や、まな板・割り箸などが展示され、ハッピを着た推定20～30代のお兄さん達が談笑しています。

その前には、スギで作られた屋台が見え、若い女性や子ども達がパンやジュースと一緒に、スギ製のマスに入った清酒を通行く人に勧めています。

4月に大阪府吹田市の万博公園で開催された「ロハスフェスタ」。

「健康」や「環境」をテーマに、手作りの自然食品やクラフトの小物を販売する店が並ぶ中、「日本全国スギダラケ倶楽部」の関西支部＝「スギやねん、関西」の、その名の通りスギ満載のブースは、大きな存在感を放っていました。

「『木はカッコ悪い』というイメージが林業を悪くしてるんやと思います。」

揃いのハッピを着た石橋輝一さんは笑います。「『スギダラ』はデザインを大事にしています。『スギってカッコええやろ』っていうPRが必要なんです。」

「スギの町」吉野

広い、広い川に並行して走る国道を東へ進むと、やがて道路は堤防の上に出、視界の右手に広がる他にない光景に、人は吉野に着いたことを知ります。

眼前に広がる吉野川、

すぐ向こうに立ち上がる吉野山、

そして川と山の間に立ち並ぶ製材工場…

「桜の町」吉野の、本当の顔を知る瞬間です。

現在31歳の石橋輝一さんの本当の顔は、父親が経営している「吉野中央木材株式会社」の専務取締役です。

吉野育ちですが、北海道での学生時代、大阪でのサラリーマン生活までは、「アパートの貼ったようなフローリングを、『これが普通のもんや』と思ってました。」と、木には縁のない生活でした。27歳で吉野に戻ってきたのも『実家の家業やし…』という理由で、「スギとヒノキの違いも分かりませんでした。」

「日本全国スギダラケ倶楽部」は、その頃、既に出来ていました。本部で企画された「吉野杉ツアー」を「吉野中央木材」が仕切った所から、関西支部の活動も始まっていました。

「おもしろそうやな」と加わった石橋さんは、関西支部の広報部長として、各地を走り回ることになります。イベントを通じて、同じ空気の人が集まってきて、どこへ行っても酒を飲む、「バードなボランティア」という感じですね。」

「ミーハーでいいんです。『木は気持ちええ』というとこから、結果として林業が復興して環境が良くなれば。」

CAST 1

吉野中央木材

青年専務が語る、製材業界の現在

「スギの梁」の存在感

筏が吉野川を下っていた昔から、材木の集積地として栄えてきた吉野町ですが、この地帯に製材所が建ち始めたのは昭和初期だそうです。戦後に増え、30～40年代のピーク時には、80軒もの製材所が、山と川の間にひしめいていました。

「吉野中央木材株式会社」は、60数年前に設立され、スギ・ヒノキの無垢材を中心に扱っています。「昔はヒノキの柱とスギの造作材でしたが、木材が売れない今は、フローリングや特注品まで、何でもやっています。」専務の石橋輝一さんは言います。

大きな原木を製材機で挽いています

広い工場内は、市場で購入してきた原木から、出荷を待つ製品まで、様々な段階のスギ・ヒノキが積まれ、10数人の職人さんが、大小の製材機を操作し、木を切る音が四方から聞こえてきます。

「スギは品質安定度では劣ります。反ったり曲がったりした物は、再度挽き直して出荷します。」と石橋さん。挽いた材の断面には、その寸法や節の有無等が細やかにメモしてあり、場所や注文に即応できる工夫がされています。

敷地の一角に、梁として使う立派なスギの角材が積み置きされていました。

「大断面のスギの角材の人工乾燥は、100℃前後の高温乾燥でないと乾かないため、木に対するストレスが大きく傷めてしまうし、酸っぱい焦げたような臭いになってしまう」ため、機積みによる天然乾燥にしています。

機積みされているスギの梁材

年間10軒分の注文があるそうで、「スギの梁」の存在に、なぜかこちらまで勇気づけられた気になりました。

木材流通と製品市場

製品の販売先は、昔は「材木屋1本」。地域内にある製品市場に規格品を納めるだけで成り立ってきました。「市の日は業者が押し寄せて、市場の中を歩くこともできなかった」そうです。「規格品を作って買ってもらうのは無駄も無く生産性が良いです。営業のためには材木屋の力と情報が必要でもありました。」

「でも今は、」石橋さんは続けます。「エンドユーザーに近い方が、どういう材料が必要かという情報が伝わりやすく、良い面もあります。」工務店や設計士に直接販売する分と、材木屋に流すものが半々だそうで、製品の8割が規格品ではない別注寸法になってきました。

案内してもらった製品市場は、市の開催日でないため人の気配は無く、1年前に持ち込まれた規格材が、まだ売れてない印である緑色のラベルを貼られたまま、いつまでも出番を待っていました。

吉野材の未来へ

「昔に比べて価格も半値以下に落ち、丸太が売れないので木が入らなくなってきました。」と石橋さんが言うように、木に関わる方々が苦しいのは、「吉野中央木材」でも同じです。この地域の製材所も年々減少し、ピーク時の半分くらいまで減ってしまいました。

仕事の余裕も減り、「朝に注文をもらって昼出荷ということもあります。」

「林業を劇的に再生する方法はありません。地道にやっていくしかない。」と石橋さん。京都市内の工務店と連携してツアーを企画したり、「スギダラケ倶楽部」のイベントで木の文化を伝えるなど、無垢の吉野材のPRに努めています。

「しかし、新しい仕組みが必要なことは確かです。エンドユーザーの意識が山の方を向いている今だから。」

石橋輝一さん

特集

日本全国スギダラケ倶楽部

「スギ」という名のもとに

第2話「仲間の絆」〈N・E・T WORK〉

酒飲みでギャグでフリーな団体

「日本全国スギダラケ倶楽部」(以下「スギダラ」)と、その関西支部「スギやねん、関西」(以下「スギ関」)を知ったのは2年前でした。

当時、「木に関わる人」と言えば、「伝承の技で木々と対峙する、日焼けした寡黙な男達」という、「野生的」かつ「情緒的」、「限定的」なイメージがあっただけに、ホームページを初めて見た時の衝撃は・・・

画面を埋め尽くす形式フリーな情報、若い女性陣に目立つ勢いある文章、ブログの各所に登場する宴会中継、「スギ」で繰り返されるオヤジギャグ、全員が「スギ」を付けたハンドルネームで投稿する若者的な内輪ノリ、そして、「スギ」に対するあけすけな愛情表現・・・

従前のイメージを逆転する「現代的」かつ「都会的」で「開放的」なページに、強い関心と拒否反応が同時に起こったのを覚えています。

「ロハスフェスタ」では、女性と子どもが大活躍！

「インターネット」という媒体を土壌にしているので、参加にも、字数にも、発信にも制約がなく、その自由さが若者や女性の積極性を引き出し、「スギダラ」の会員は5年間で千人に達しました。

そこには石橋さんのような製材関係者以外にも、工務店や木工作家、造園士など木の専門職で活躍している人も多く集っています。

こうして、現代的なメディアを通してスギに対する個々の想いがつながり、プロジェクトとして大きな動きに発展して行くのです。

「ネット」から「ネットワーク」へ

「スギダラを通じてと、吉野から発信するのでは、PRの効果が違います。知り合った方から注文をもらうことも多いです。」石橋さんは言います。

「スギ関」は5人の役員に10人ほどのコアメンバーが加わった組織ですが、イベントや飲み会の度に新たな顔が増えています。「自由に動き回って、とにかく人目につくことをして、木をどんどん使ってもらおうとPRしています。」

安全住宅のコーディネートを行うNPO「まどり」に勤める、建築士の水木千代美さんは言います。

「スギダラの魅力は、『大きなネットワーク』である所です。国産材を何とかしていこうって人が集まっています。」

NPOで製作する積み木の材料を探している時に、ホームページで吉野中央木材を見つけ、遊びに行ったのを機会に「スギ関」に加わるようになりました。

「営利目的で集まっているわけじゃないから楽しい。」という水木さん。「スギ関」のブログには、林業家の『出来杉』や大学教授の『しゃべり杉爺』、無職の『ニート杉』など、個性あふれるハンドルネーム=「スギネーム」の楽しいキャラクターが続々、登場しています。

スギネーム『ふらふらし杉』の水木さんですが、「みんなからは『オラオラ杉』とか『鬼の会計』とか呼ばれてます。」と苦笑い。「でも、お金ではないものを得ているなあと、いつも実感しています。」

「スギダラとのコラボで生まれた一番のもの」と水木さんが嬉しそうに話すのは、「ゆめのみフェスタ」という子どもたちのイベントです。

元々関わっていた吹田市内の公園を通じたまちづくりが、「スギ関」との出会いから、子ども向けのスギ体験イベントになり、次回ではスギ屋台の製作を通したカフェ運営体験へと飛躍しました。更に翌年には、「コドモスギコレ」というデザインコンペを兼ねたワークショップへと発展を続けています。

「国産材を通して、ものづくりを通して、一つのことを成し遂げることを通して、子どもに大事なことを伝えていける。それは、スギダラだからこそ実現できたんです。」

CAST 2

NPO法人「まどり」

主婦と国産材が導く「安全住宅」

生協の相談業務からスタート

大阪府交野市の「NPO法人まどり」は、安全な住まいづくりの実現のため、電話相談や勉強会などの非営利事業と、住宅コーディネートや国産材を使った家具の販売を行っています。

自宅を改装した事務所で住環境全般の相談などソフト面を担う代表の井上富見代さんと、国産材家具の開発・設計を中心に手がける水木千代美さんの、女性スタッフ2名で運営しています。

始まりは約15年前、アレルギー体質の子どものために、井上さんが家のリフォームを考えたことからでした。

「新聞で、新建材から出る化学物質が過敏症の原因だと知り、新建材を使わないよう工務店に相談したら、話がかみ合いませんでした。業界が、無垢の木を扱わないようなシステムだったのです。」

1年かけて業者を探した体験を生協に話したことから、住まいに関わる組合員対象の「ワーカーズコレクティブ（自主管理の共同事業体）」を立ち上げることになりました。

一方、水木さんは設計会社で店舗のデザインに携わっていましたが、早世した愛娘の病因が、電磁波や農薬を使った畳表などではと疑ったことから、住宅の勉強を始めました。井上さんが載った記事を見て連絡し、ワーカーズで一緒に事業を行うようになりました。

5年後の平成14年、組合員以外にも広く健康住宅を提案して行くために、NPO法人として再出発したのです。

製材業・福祉・NPOが連携

国産材家具の販売を始めたのは、NPOが発足して間もなくのことです。

「『アレルギーの子のおもちゃを入れるのに、カラーボックスに代わる物はないか』というお母さんの相談からでした。」水木さんは言います。「一生のものではないので、お金をかけられない、安くて害のあるものか、高いオーダー家具になってしまいます。」それで、自分達でデザインするようになったのです。

「日本の森林の現状が良くないので」と、基本的に国産材を使っています。「家は限られた人のものだけど、家具は誰でも手に入ります。『木っていい物』と分かってもらえれば。」

ラックや机など国産材の組立家具は評判も良く、3、4年で子どもの玩具まで手がけるようになりました。

そんな中、つきあいのある木材会社から、『製材した残りを燃やしているが、樹齢何百年の命を使い切れず、もったいない』という相談がありました。

ちょうど天理市の知的障害者更生施設が、障害者の作業を探していて、製材・福祉・NPOの3者が一致して「やさしい積み木」が誕生しました。

ここから、製品加工を福祉施設と連携することが増え、今は関西で3ヶ所、関東で2ヶ所の作業所が製作しています。

出産祝いなどに人気の「やさしい積み木」

「生活者の視点で」

大好評の積み木からは、製材時に出た端材で作った入浴剤「つみきっこ」や、続編の「セカンド積み木」といった姉妹品も生まれました。「『ファースト積み木』は赤ちゃんが最初に出会う物、『セカンド』は幼稚園向けです。」と井上さん。

他にも、各地で親子対象の木工教室やセミナーを開催していて、「住まいから、家具から始まったけど、国産材を軸に広がって行きます。」と水木さんが言うようにネットワークが広がっています。

井上さんは言います。「2人とも主婦なので、生活者の視点で作れます。エコノミーでエコロジーなことを続けて行きたいですね。」

住宅から家具と玩具へ、NPOから製材と福祉へ。「国産材」と2人の発信は、まだまだ多くのモノを結びそうです！

井上富見代さん（右）と水木千代美さん

特集 日本全国スギダラケ倶楽部

「スギ」という名のもとに

第3話「運命の出逢い」〈DESIGN〉

デザイン・フォー・スギ

「『スギダラ』はデザインが大事です」

「『スギダラ』はデザイナーから発信した団体です」

「デザインには、すべて理由がある」

今回の取材で最も耳にしたキーワードは「デザイン」です。

一体、デザインって何ですか？

「幹田君、これからは間伐材もデザインが重要な時代になるよ。」

「幹田君、誰かデザイナー紹介してや」

「幹田君、オマエもうちょっとデザイン考えなあかんで！」

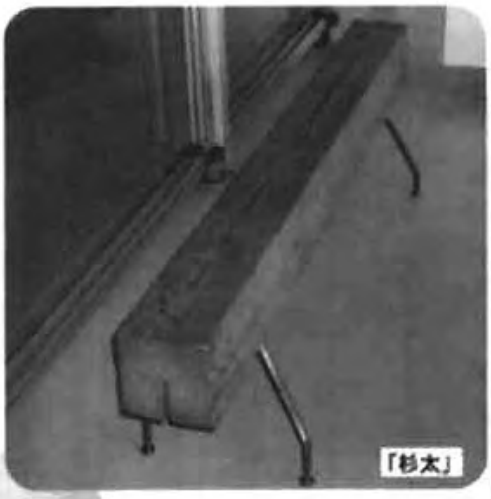
最近、周りの間伐材関係者が「デザイン」をやたら口にするようなりました。

デザインって、そんなに大事ですか？

今まで「デザイン」といえば、「ファッション」とか「おシャレ」とか「西長堀」とか、「肩からカーディガン掛けてる」とか、そんなイメージを持っていました。

今回の取材で、偏見は消えました。

これは、製材所で挽かれた普通のスギの規格材に、金具を突き刺した物です。



「杉太」

これが、スギのイメージを変えました

＝街に「スギのある風景」を創りました。

これが、地域経済の流れを変えました

＝製材所に新しい事業を提示しました。

これが、人々を結び組織を産みました

＝会員千人の団体が誕生しました。

多分それが「デザイン」の力なんです。

「だから『デザイン』って何やねん！」

そんなん言われても・・・

スギ・オン・ザ・ヨットフロア

遠く、遠く、運河の向こうに東京湾が見えます。

初夏の青い空と海を、四角形の埠頭やドーム型の建造物など人工的な図形が切り抜き、ガラスの向こうに映るその景色だけで一つの先鋭的なアートを作っています。

そんな巨大なグラフィックが壁の一面を構成しているオフィスは、そこにいるだけでアイデアが湧いてくるような、クリエイティブな空間でした。

東京都江東区。オフィス家具で有名な「内田洋行」の「潮見オフィスg晴れ。ここ」に、「日本全国スギダラケ倶楽部」の本部事務所があるのです。

「スギは立体面になると、雰囲気を作り出す力があります。インテリアの素材として、今まで使われてなかった所に活用できるのです。」

このフロアでオフィスデザインの企画を本業とする、「スギダラケ倶楽部」広報部長の千代田健一さんは言います。

「デザインやってる人が始めたのが『スギダラ』の最大のキーワードなんです。」

スギタ・キャン・ドゥ

平成13年。東京都渋谷区でデザイン事務所を構えるデザイナーの南雲勝志さんが、上の写真にある「杉太」というスギ製のベンチを発表します。

これは、宮崎でスギの魅力に惹かれた南雲さんが、スギを家具の材料として使うことで木材業界の現状を打破できないかと創り出したものです。

それを見た「内田洋行」テクニカルデザインセンターの若杉浩一さんが「この考え方だ！」と賛同し、同僚の千代田さんに声をかけて、歴史は始まりました。

千代田さんは言います。「内田洋行でも『間伐材を使いたい』という学校の要請を受け、10年近く前からスギを使ったファニチャーも作っていました。」

しかし、木製の製品は金属製より遥かに製作費がかかりました。「木は、野暮ったいし、空間に合わず、へたりもある。クレームも受けるし、いろんな人が不幸になって行くシナリオだったのです。」

そんな時に、「杉太」は、オフィスというフィールドの中で、空間の質感を高めて行く力を持って登場したのです。

「そこには新しい物流、新しい地域との連携が示唆されていました」と千代田さんが言うように、普通の製材に脚をつけただけの「杉太」は、材の調達も加工もシンプルだったので、各地の製材所が事業化することも可能でした。

3人は、何かのイベントの度、ショールームに飾るなどのPRを続けました。これが好評で、「味があっていい」と気に入ったお客さんが、帰って自分の客に宣伝し、仲間は増えていきました。

イン・ザ・ネーム・オブ・スギ

同じ頃、宮崎でランドスケープデザイン業務を行っていた南雲さんに、「地場のスギを使って子どもに課外授業ができないか」という話が来ました。

3人で行った「移動式夢空間」という課外授業は、スギ製の屋台を小学生自ら設計・製作し、まちづくりに使う4ヶ月のドラマでした。「子どもたちが、まちのことを考えて真剣になれ、それに関わる大人に育っていく感動的な授業でした。」と千代田さんは振り返ります。

「杉太」と、この「移動式夢空間」を通して「スギには、街づくり、ものづくりだけじゃない、人を結びつける力がある。」と感じた南雲さん、若杉さん、千代田さんの「スギダラ三兄弟」によって、「日本全国スギダラケ倶楽部」は5年前に誕生したのです。

その後の「スギダラ」会員の急増ぶりを、「バーチャルコミュニティーからリアルコミュニティーに集まった」と千代田さんが解説します。

インターネットは「簡単に賛同者を集めるための情報発信の場所」。ホームページの他、「月間杉」というウェブ専用の月刊誌を発行し、制約のない自由形式の原稿が集まる、その情報量に驚きます。

また林業先進地を中心にツアーを組み、宮崎、天竜、秋田など訪れた地域で必ず飲み会を設定、その度に支部を増やして行っています。

「スギを切って使うサイクルを循環させないと。生まれてきたものだから、活用した方がいい。」千代田さんは言います。「でも、まじめ腐って考えたら楽しくない。ものづくりを現代的に解釈して、楽しさをアピールしていきます。」

CAST 3 内田洋行

「空間を作る企業」の物流革命

「内田洋行」は「スチール家具の会社」というイメージですが、千代田健一さんに案内して頂いたショールームは、最新の情報技術あふれる未来空間でした。

壁に並んだ個々のキューブに、ワインのタグ1枚に、膨大な情報が蓄積され、画面に内容の全てが表示されるのです。

「今ある空間を生かして、その空間の質を更に高めるためのインテリア『スマートインフィル』を考える会社です。」

無垢材の活用も進んでいます。

別フロアのショールームには、白を基調とした無機質のオフィスの中に、製材所から直行してきたような国産材がパネルや家具として使われ、温もりのある落ち着いた雰囲気を作り出しています。

「木材は、それだけで雰囲気を作ります。更に、地場の余って困ってるものを使うことで、デリバリーのスピードが変わってきます。」

「杉太」が扉を開いたのでしょうか？

去年からは、ついにカタログに載る製品も生まれました。名前は「アシカラ」。

写真の脚部分の金属製品がそうです。製材所で挽かれた板材を載せるだけですが、丸テーブル用、二段の棚用など、多彩なバリエーションが楽しめます。

脚から物流を変える「アシカラ」

千代田さんがニヤッと笑いました。

「ちなみに、複数形は『アシカラズ』。」

…そう！　楽しさをアピールしてこそ、伝わるものがあるのです。

千代田健一さん

特集

日本全国スギダラケ倶楽部

「スギ」という名のもとに

第4話「スキなんだ！」〈THE TREE〉

悲しみはスギのように

どれだけ育ったら、木として認めてもらえるのだろう？

いくつの山を越えたら、生まれてきた目的を果たせるのか？

友よ、いや、人よ、その答えは・・・

「スギ」という木が悪者になって久しいです。

やれ、林野庁の失策だ、やれ、野生動物が生きられない、やれ、花粉症の原因になる、やれ、地球温暖化がどうたらこうたら・・・

ヒドイのになると、花粉対策で倒されたり、広葉樹林に植え替えられたり・・・

これって、スギには何の罪もないし、それ以前に、背中一杯に苗木を背負って急斜面に一本一本、植えていただいた先人の方々に対して、めちゃめちゃ失礼ですよね？

・・・まあ、そんなカタいこと言ってても、状況は変わりません。

スギには実に多くの魅力があります。それは、木材としての実用性から、真っすぐそびえ立つ情緒的なものまで色々です。いや、魅力があるからこそ、2千年以上も前から、日本人とともに歩んできたはずです。

それが伝わっていないのです。

「日本全国スギダラケ倶楽部」に人が集うのは、①斬新なスギのPR、②ネットからの盛り上がり、③デザイン革命・・・色々ありますが、やはり④「スギ」そのものが核になっていることは、間違いありません。

なぜスギがスキなのか？

他の木じゃダメなのか？

その愛をどう伝えて行くのか？

今回の記事で、その答えを出すつもりはありません。その謎を、可能性を探り続けることが、面白いのです。

海辺に立つスギのように

上へ、上へ、まだ続く閑静な住宅地の狭い急坂。頂いた地図を片手に車を走らせます。バックミラーに映る街並みは大阪か神戸か？

だいぶ空に近づいた所で行き止まり。道を間違えたかと車を止めたすぐ横に、アトリエの看板を目にしました。

この兵庫県宝塚市の「雲雀丘」で家具工房を構える狩野新さんが、笑いながら出迎えて下さいました。

「狩野新アトリエ」では、机やタンス、ベッドなどの家具から、店舗のリフォームまで、木を使った美しい作品を作られています。

ホワイトオーク、ナラ、タモ、ビーチなど世界各国の木材が使われていますが、一番好きな木は、スギなんです。「安いし、塊で使える所が、すごく魅力です。」

特に好きなのが吉野杉だそうです。「いろいろな等級があって、用途に応じて使い分けています。」

近所にはスギ等の国産針葉樹を専門に扱う店がなく、ホームページで「吉野中央木材」を見つけられたそうです。以降、狩野さんのスギ作品のほとんどは、吉野材で作られています。

そんな狩野さんが「日本全国スギダラケ倶楽部」の会員になったきっかけは平成16年、宮崎県日向市で「第1回スギコレクション」というコンペに参加したことでした。

このコンペは、日向市駅の駅舎をスギ材で建て替えるのに併せた、スギ活用型の周辺整備の一つで、その時のテーマが「ステーションファニチャー」でした。

スギの直立した姿と、日向の美しい海をイメージしてデザインした「スギナミキ（ベンチ）」という作品は、見事にグランプリに輝きました。そして、授賞式後の親睦会で南雲さんにスギダラのことを聞き「面白そうなので」入会しました。

その後、狩野さんが「吉野中央木材」をスギダラに紹介し、これがきっかけで全国の会員から「吉野ツアーをやろう！」ということになり、スギダラ最初の大イベントとしてツアーは成功しました。

そこから関西支部が発足したのです。始めは緩やかでしたが、「女性会員が増えて一気に元気になった」そうです。

CAST 4

狩野新アトリエ

新種の生命が宿る、スギの家具

ベルリンの木工職人に衝撃

狩野新さんは大学を卒業後、建築士を目指しながら、関西新空港を設計したレンゾ・ピアノ氏の事務所に、空港の完成前後まで勤めていました。

最初に、木を描かされたそうです。「木がなぜ構造体として成り立っているか、できるだけシンプルに、何度も描かされました。植物など自然にある物の形には理由があり、デザインにも全て理由がある。それが分かるようにと。」

その後、父親の事務所に勤めました。そのころベルリンに行く機会があり、現地でお世話になった木工職人の作品に、カルチャーショックを受けます。

「端材をはぎ合わせて作られたオイル仕上げのシンプルなテーブル。手触りもよく、木のぬくもりを感じました。五感で感じる家具とはこういうものだと思いました。」狩野さんは振り返ります。

「それでいて木を全然捨てずに作っているのです。表板だけベニヤを使い、上からウレタンを吹き付け塗装している日本の家具の、シンナー臭いイメージとは全く違いました。」

「それまで家具には興味なかった」のが一転、平成11年、宝塚市雲雀丘の自宅に家具工房のアトリエを開きました。

「イスになれ！」

狩野さんの作品には、不思議な形のものが多いです。三角形が重なった形だったり、四角形の座椅子なのにネコっぽいイメージだったり・・・

「作りました」ではなく、「生まれました」という感じ。木の中に住む魂が、全く違う生き物や造形物に宿り、新種の木材に生まれ変わったようです。

「プレスギ」という名前です

「釣りに使う『ルアー』は究極の形だと思います。背びれも何もないけど、魚ということが分かる、究極のそぎ落とした形。」狩野さんは言います。「植物や魚の骨を構造に生かせないか。『いかにもデザインした』ではない、自然にある物の知恵を拝借して物を作りたいのです。」

関空の設計事務所で何度も木を描かされた体験から始まっています。

「三角形のヤツ（プレスギ）は樹木の枝、幹、根から成り立つ原理を応用しています。丈夫で美しいイスが作りたくて樹木から知恵を拝借させて頂きました。」

アトリエの窓際には、サツマイモがコップに植えられ、芽が伸びていました。「『イスにならないかな～』と思いながら、ぼーっと眺めています。」

物語を創り出すスギのように

さて、グランプリを獲った狩野さんの「スギナミキ」は、日向市駅の完成が近づいた平成18年、宮崎の職人の手で製作され、2ヶ月で完成しました。

新駅オープンの前日のプラットフォームで、自らデザインしたスギの作品と対面した時の感激は、ひとしおでした。

「俺、何でスギで家具作って泣いているんやろう？」狩野さんは自問したそうです。「他の高級木材では、そうはならない。スギって不思議ですね。人をつなげる力がある。かわいいです。優等生じゃないから？」

近くの住宅地のゴミステーションを頼まれて作った時も、材料はスギ以外は考えられなかったそうです。「赤身は耐久性が良いので腐りにくい、というのもあります。でも、それ以上に、スギじゃないと、物語が生まれないんです！」

一度、ゴミステーションが破損して欠片がなくなった時も、住民が小さな欠片を見つけて大切に取っておいてくれて、きれいに補修することができました。

「スギには、物語が自然に出てくる不思議さがあります。」と狩野さんは熱く語りました。「スギを使うと、日本が抱える様々な問題に直面します。このような体験が、とても大切だと思っています。」

狩野新さん

P.3からのつづき

「山見学&工房見学ツアー」報告

（H21 6/21）

これは**神奈川県川崎市**のマンションから依頼のあった物で、来週の納品に向けて追い込みに入ってるそうです。

「日が当たり乾燥する場所なので、裏板以外はヒノキで作った」棚は、ヒノキの美しい肌と、スギの自然な節が、親しみやすい雰囲気を作り出しています。「全てヒノキだと割れてしまうので、**裏板のスギで力を吸収**して割れを逃がしています。」面白いですね。「適材適所なんです。」

ご自宅のリビングも、スギのフローリングの上に、**スギ製の囲炉裏用テーブル**やテレビ台が設置されたショールームになっていました。

参加者10人がゆったり座れる2台のスギテーブルで、コーヒーを頂きながらしばし歓談。

「木って面白いですね。」林さんは言います。「全然売れなくて、10年間倉庫に寝かしておいた材が、パッと売れたりします。」

材料のスギは丹波市の**「丹波林産振興センター」**で、ヒノキは篠山市に住む知人の林業家から購入します。「ピーリング（皮むき）の現場で買ってきます。使える部分を落としていたらもったいないので。」と言う林さんの作品は、製材なら捨てられる箇所を、逆に面白く使っています。

ショールームの前に、**不思議な模様の時計**がかかっています。熱帯の方の珍しい木かな、と思ったら、これもスギで、根の近くを縦に切った物だそうです。「普通の製材にしたら一円の価値もありませんが、こんな木目が人気あるのです。」

「他の職人たちと話していて、『スギで家具を作っている』と言うと、たいていの人がビックリします。」林さんは楽しそうに言います。「スギは難しいです。逆むけはするし、節が飛びやすく、傷もつきやすいです。」

自宅リビング兼ショールームで、スギを語る林さん

それでもスギが好きな理由を聞くと、「スギは、**無駄なく何でも使える**んです。収納の扉から、引き出しの取っ手から、どんな色合いにも対応します。」広葉樹の家具なら、『ここはケヤキ』『ここはクリ』と場所によって使い分けが必要となります。「全部スギでいけるんです。迷う必要がありません。」

午後4時過ぎに林さんの工房を出て、東条湖までフラッとドライブして、東条ICで解散しました。その後、都会組は渋滞につかまり、夜7時に帰阪・・・田舎組は5時半に綾部に戻り、めぐりちゃん家で1時間ほど夕涼みして解散、ホンマ楽しかった～！

本職の皆さん、休日だというのに、ド素人10人を快く迎えて下さり、本当にありがとうございました！

「山作業」も「木工」も、月に1、2度集まるだけの私達にとっては、「趣味」レベルに過ぎません。でも、「学ぶ」こと、「楽しむ」こと、そして「伝える」こと、これらは、いつも、めっちゃ本気です！だから、今日の経験は、ホンマに大きいと確信しています。

これからも、どうぞ、よろしくお願いします！

・・・というわけで

「山&工房ツアー」以外にも、3～7月活動報告や総会報告、その他報告（緑推研修ほか）など報告事項がたまりまくってますが、紙面の都合で、次号で掲載します。

次号（第28号）予告

特集

「割り箸絶対支持宣言！」

JUON NETWORK（東京）

辰田製作所（奈良・吉野）

ほか 【10月初旬発行】